

〔翻 訳〕

イラズマス・ダーウィン著

「植 物 の 愛」 (7)

出版 1806 年

翻訳 加 藤 芳 子

第 3 編

草の波が、ジャワ島の緑のシュロの海辺で

220

楽しい反射を、微笑み返す所では

広い平野が、高地の景色を広げ

岩山が次々とそびえ、泉がその間をほとばしっている。

そよ風が優しく吹き、常夏が支配し

豊かな雨が土に恵みを与える——事はない！

225

芳しいナツメグが、春のそよ風を香しくする事もなく

聳え立つプランターンも、昼の谷間に影を作る事も

草の茂る衣が、暗い山脈を隠す事も

花の冠が、ちょろちょろ流れる小川を飾る事も

コケの茂みも、革のように堅い地衣 [類] も

230

崩れかけた絶壁の上を、朽葉色に染めて這う事もない。

——砂の上に跡を残した、退却の足跡が

第二の訪問者を、招く事もなく

逆流する水平舵<sup>だ</sup>が、人も住まない流れを分ける事もなく

天がける翼が、空気の潮を切って進む事もない。

手のあるモグラも、口ばしのある虫も

235

引き返せない目的地である、あの坑道を戻る事もない。——

枯れたヒースの上で、いやに恐れて無言で

死のヒュドラーたる、猛毒のウパスノキが座っている。

見よ、一本の根から、地下の毒氣を帶びた土壌が

千匹もの植物性の、ヘビを育てている。

240

明るい日差しの中で、この剝げ落ちる怪物は

十平方リーグにもわたり、その分岐する頭を広げて

一本の幹に、その縛れた姿を絡みつけ

雲を見渡し、嵐の中でシューシュー音を立てる。

致命的な毒につかった鋭い歯が分かれると

245

千もの舌が素早く震えながら、飛び出してきて

ヒースの丘の上を舞い上がっている、誇り高きワシも捕まえ

下をうろついているライオンにも、いきなり襲いかかる。

整列した軍勢が、空しく闘う間も

人骨を撒き散らし、平野を [ホヤ] 白くする。

250

木の根元には、二人の若い悪霊が住み

かすかにシューシュー息をしたり、ぞつとする叫び声をあげ

羽も生えてない翼を広げ、空中に羽ばたき

獲物の昆虫めがけて、小さな針を放つ。

こうして「時」の強い腕は、一掃する大鎌で

255

芸術の悩ます作品や帝国を、その台座から消してしまう。

一方若い「時間」は、よく切れる小鎌を使い

家庭内の喜びの、甘美なつぼみを刈り取ってしまう！

朝が明るい紅潮で、美しいランを魅了し

彼女の赤子を、その愛撫する腕の中であやす頃

260

「植物の愛」(7) (加藤芳子)

「偏愛」は、彼女の胸の玉座の辺りで戯れ  
自分の命も忘れて、彼の命を守る。  
それで夜に待ち伏せした、弓の射手に射られて  
傷ついたシカは、真っ逆さまに飛ぶように駆ける。  
そして飛び跳ねるフォーン達と一緒に、森林地へと駆けていくと 265  
血の滴りが、知覚のある芝生をぬらす。  
そこでは木陰に隠れて、彼女は明るい日差しを避け  
子供の上に被さり、自分の命が尽きていくのを泣き悲しむ。

そしてイライザは、ミンデン平野に聳える森を戴く 270  
高所の上で、血まみれの争いのさ中、戦いの目撃者として  
大胆な目付きをして、彼女の人生の伴侶たる  
彼女の愛しい、自己を探した。  
丘から丘へと、突進する軍勢を追いかけ  
彼の軍旗を見つけるか、見つけたと信じた。  
叫び声が遠いのに喜び、急いで歩くと 275  
彼女は舌足らずの男の子の、手をきつく握って連れてきた。  
そして声高の警告の中を、スカーフにくるみ  
腕の中で眠る美少女も、連れてきた。  
その間彼女の額の周りには、「名譽」の明るい光が放たれ  
「キューピッド」の暖かい小さな渦が、彼女の心臓の周りで回っている。 280  
——大胆な「美」は、どんどん近くに突進してきて  
聖なる煙を通して、彼の踊っている頭を見た。  
彼女の処女の手が、彼のかぶとの上に金の明るい星と  
神秘的な愛の結び目として、織り込まれているのを見た。  
「敵が逃げていく！逃げていくぞ！」という、勝ち誇った叫び声を聞いた。 285  
「偉大な神よ、彼は無事です！戦いは勝ちました！」と彼女は叫んだ。  
—— ところが空気の潮を通って、弾丸が一つ

シューッと飛んできて、彼女の優美な頭を飾る  
 美しい金髪を裂き、美しい耳を傷つけ、首の中に沈む。  
 彼女の青い血管から流れ出る、赤い血の流れは  
 その白いヴェールを血の色に染め、象牙の胸を血で汚す。——  
 —「ああ」と叫ぶと彼女は、地面に倒れ  
 傷も気にせず、愛する赤子達にキスをした。

「おお、汝、命の泉よ、まだ鼓動を止めないで！」 295

「ほとばしる命よ、待って、おお、私の「恋人」が戻るのを待って！

「オオカミは声をからして吠え、ハゲタカは空高くから鳴き叫ぶ！——

「天使は、「哀れみ」よ、戦争の歩みを避ける！

「おお、汝ら戦争の獵犬よ、彼らの若い年令を容赦して下さい！

「あなたの怒りは、私にだけぶつけて下さい！」と彼女は叫んだ。——

それから弱々しい腕で、泣き叫ぶ赤子を愛撫すると

溜息ついで、自らの血の染み付いた衣服の中に隠した。

テントからテントへと、この気短かな兵士は飛び回る。

心には恐れを、眼には逆上を見せて

彼はイライザの名を、野営テント中で呼び

イライザは、キャンバス地の壁を通してくり返す。

素早く、ささやく暗闇の中を、彼の足取りは歩む

呻き声を上げる、死にかけている者や死んだ者の山の上を。

平野の上や、絡みあった森の中を飛びまわる。

見よ！死んだイライザが、自分の血の中に浸っている！——

——耳を澄ましていた彼の息子は、すぐに歓迎の音を聞く。

両手を広げ、眼をキラキラさせて、彼は跳ね回る。——

「小さい声で話して」と叫ぶと、その小さな手を差し出す。

「イライザは、冷たい露の砂の上で眠っているよ。」

哀れな泣いている赤子は、血だらけの指で母の

290

295

300

305

310

315

「植物の愛」(7) (加藤芳子)

乳の出るわけのない胸を押し、口をすぼめて吸おうとした。

「ああ！僕らは二人とも、寒さと飢えに震えてるね」――

「なぜ泣いてるの？――ママはすぐに目をさますよ。」

――「もう目はさまさないんだよ！」絶望した哀悼者は叫ぶと

320

目を天に向け、両手を握ると、溜息をついた。

しばらく地面に大の字になると、感極かんきわまって横たわり

命のない土と化した彼女に、暖かいキスを何度も押し付けた。

やがて荒々しく痙攣を突発させると、とび起きて

心の中で、「父親らしさ」にすっかり火がともった。

「おお天よ、私の初めてのせっかちな誓いを許して下さい」

と彼は叫んだ。

325

「この子達を大地に縛りつけて下さい。生き返ってほしいからです。」――

冷たくなった赤子の死体を、自分の真っ赤な服でくるむと

涙にむせびつつ傷で痛む胸に、赤子を抱きしめた。

二人の売春婦のニンフは、美しいネナシカズラを

のろくさい怠慢と、作意のある気楽さで喜ばせる。

330

控えめな価値という、おとなしい服に変装して

目をそらし、清純そうな微笑を浮べ

恥ずかしげに近づき、危険な魅力を伸ばし

犠牲者の周りに、その針金状の腕を巻きつける。

そのように、トロイアの誇り高き塔が、流れにきらめき映る

335

スカマンデル [スカマンデル] 川のほとりに、ラオコーン [ラオコーン] は立ち

手を高く掲げ、予言の声をあげ

縮み上がる王国に、トロイアの陥落の運命を告げた。

人並み以上の力で、その恐ろしい槍を振り回し

同じ事を言っている馬の太い肋骨を刺し貫いた。

340

大海原を覆うように、二匹のヘビの姿が  
 長々と続いて、白波を蹴散らし  
 青い首を丸め、そびえる首筋を振ると  
 斑点のある胸で、泡立つ道を切るように走った。

345

それから怖がる群れの中を、荒々しく突進し  
 赤い目をキヨロキヨロさせ、二枚の舌をチラリと出した。—  
 二人の勇敢な若者 [ジオニー] は、神々しい火を守ろうと  
 ヘビの恐ろしい前進を邪魔し、その怒りを誘発してしまう。  
 ウロコの怪物は、火と息子達の周りを回り  
 幾重にも輪を作り、縛れたとぐろを巻いた。

350

子供の苦しむ四肢を、どんどんきつく締めつけ  
 泡吹く牙で、毒入りの傷を負わせる。  
 —額を天に向けると、かの聖なる賢者 [ゴーン] は  
 苦惱に声もなく、ヘビの怒りに耐える。  
 その間二人の優しい息子は、つんざくような叫び声を上げ  
 苦しむ父に、空しくその死にゆく眼を向ける。

355

「愛らしい若者よ、沢山飲みなさい」魅惑的なブドウのつるは叫ぶ。  
 涙もろい涙のしずくが、その眼に光り  
 青々とした葉と紫のブドウの房が、その頭を飾り  
 背の高い [バッコス酒神の] 杖が、そのよろめく足取りを止める。  
 この壳春婦は、五人の不運な恋人を、穏やかな和める微笑で  
 その破滅的な苦しみのさ中でも、わなにかける。

360

「ぐっと飲んで、心配なんか忘れなさい」と  
 紅潮させる杯を空中に振りかざし、歌い祝う。—  
 有害な鍊金術は、恐ろしい宴を見回し顔をしかめると  
 ネクタル入りの大杯の中に、毒を混ぜる。  
 すさまじい痛風がにっと笑いながら、この見え透いた光景をちらっと見ると

365

「植物の愛」(7) (加藤芳子)

膨れた水腫は、背後で隠れてあえぐ。  
白いハンセン氏病は、衣にくるんで、その汚れを隠し  
無言の狂乱は身もだえして、その鎖をかじる。 370

それでプロメテウスが、雷神ゼウスの怒りをものともせず  
その光りに輝く玉座から、天上の火を盗み  
その胸にともして、日光の領土から  
彼がチリで創った人類へと、この明るい宝物を運んだ時——  
彼はウルカーヌス [ローマの火] と鍛冶の神に、寒いコーカサス山の高所に縛られ 375  
かの痩せた気の短いワシは、彼の周りを羽ばたき  
彼は四肢をもがいて、その堅固無比の鎖を  
何とかして切るか、解こうとするが、むだ。  
この貪欲な鳥は、彼の激痛に勝ち誇り  
彼の腫れ上がった肝臓を、無情な牙で引き裂く。 380

優しいお供えのパン [ミガヤ] は、露の眼をして  
命のない赤子に、最後の溜息をつく。  
信心深い手付きで、地面に低く身をかがめ  
その愛しい死んだ子を、砂の中に埋葬する。  
「まだ若いのに枯れてしまった。可愛い乳飲み子よ！」 385  
「おお、お眠り、そしてもっと美しい花と生き返りなさい！」と叫ぶ。  
——それでペストが、ロンドンの喘ぐ群集の中に  
その湿っぽい翼を振り動かし、霧の濃い雲を向けた時  
友もない棺の上に、葬式の典礼が読まれず  
葬送歌がゆっくりと歌われる事も、棺に布が広げられる事もない時 390  
死神と夜は、裸の死者の群れを山と積み上げ  
静寂は、彼らの漆黒の靈柩車を運転していった。  
コウチョウソウは、八人の美しい娘とその父親が

殺到する墓所へと進んでいくのを見て、泣いた。

柔軟な信仰心で出来ている、彼女の優しい心は  
全てをあきらめ、悲嘆の苦い一杯を飲み干し  
生きていて、自分の悲嘆にも気付かず  
他人の悲嘆の、つぶやく呻き声を聞く！—  
彼女は甘美な希望なる、ひとりの微笑む少年を  
胸であやし、腕に抱いて暖める。—

400

悲嘆の娘よ！朝の前に、空しく愛撫され  
この冷たくなった赤子は、汝の最後の悲しい助けを求め  
その硬直した手足を伸ばすと、汝のひざの上で息を引き取った。

—長い事まぶたを大きく開き、母親は赤子を見つめた。

405

そして長い事その涙も出ない眼を、天に向けた。  
やがて足早に、ドキドキしながら、彼女は見つけた。

[ロンドンのペスト流行時]カルトゥジオ会修道院が、聖なる土地に深く穴を掘り  
夜中の暗闇の中を、最後の宝物を運び

ひざまづきながら、巨大な墓穴に下ろした所を。

410

「次は私よ！」と、この狂乱した会葬者は言うと  
生きているのに、その腐っている死体の中に飛び込んだ。

広大なオンタリオ湖が、その海水のない湖をうねらせ  
岸辺の人跡未踏の森を、育てる所では

美しいカワラケツメイが震えながら、森のざわめきを聞き  
その黄褐色の子〔種子〕を、湖にゆだねる。—

415

金色の帶した、十人の優しい兄弟が、この美人を  
その祖国の地に立ち、守る。

微風はそっと吹き、流れはゆっくりと流れ  
彼女の子供の恋人達を、ノルウェーの海岸まで運ぶ。  
—それでこの悲しい母親は、真夜中に

420

「植物の愛」(7) (加藤芳子)

血生臭いメンフィスから、そっと逃げ出すると  
愛しい赤子を、自分の服のひだの中にくるみ  
その宝物を、ドキドキする胸に抱きしめ  
ささやきでなだめながら、そのか弱い泣き声を鎮めた。

425

優しくキスすると、ひそかに溜息をついた。——  
——不屈の足取りで、彼女は入り組んだ海岸を探して歩き  
かすかに光る急流が、轟音立てるのを、恐れることなく聞く。  
紙の旗を立て、漂うゆりかごは、行きつ戻りつ  
微笑む少年を、ハスの葉の中に隠す。

430

彼女の白い胸を、彼の欲しがる唇に与える。  
塩辛い涙は、彼が吸うミルクと混ざり  
忠実な策略を心に、葦を戴く岸辺で待ち

ナイル川のウロコの怪物達に預ける。——  
——少し前に、孤独な住まいから堂々と

435

天の大天使は、預言者を虐げ  
高慢な圧制者の手から、その赤いムチをもぎ取った。  
そして呪われた奴隸制よ！汝の鉄の鎖を壊した。

聞け！あの天をつんざく叫び声が聞こえなかつたか  
波を揺さぶり、天を裂いた声を？——

440

今この時も、かなた西方の海岸では  
青ざめた「絶望」が泣き、もだえ苦しむ叫び声を上げる。  
今この時もアフリカの森では、恐ろしい叫び声を上げて  
すさまじい「奴隸制」が、地獄の犬をピシッとムチ打つ。  
谷から谷へと、群集の叫び声は反響し  
黒い国民は、音を聞き、震える！  
汝ら政治家共よ！その選挙権は

445

東西インドも従う、ブリタニアの国土を支配し  
負傷者を回復させ、勇者には報酬を与える。

強い腕を伸ばしなさい。汝らには救う力があるのだから！

450

彼の恐ろしい手段を、丸天井のある心臓に君臨させて  
動かしえない良心は、裁判を始める。

一層小声で、罪の意識の陰謀は、危険を知らせ

彼の覆われた眉を引き剥<sup>は</sup>がし、上げた手から武器を取り上げる。

しかし夜に、自らの恐怖心に包まれて

455

彼は行為が終わると、囁くような声で話す。

彼の言う事を聞きなさい！汝ら議会よ！この崇高なる真実を聞け。

「圧政」を許す者は、同罪なのだ。

羽飾りの「運命の女神」がついている輝く真珠も  
美人の耳からキラキラと、下がっている宝石も  
夜の蒼穹<sup>そうきゅう</sup>が飾っている、明るく光る星々も  
春の朝に金箔を着せる朝日も  
他人の悲嘆のために、「美德」の男勝りの頬を  
流れる涙ほどの光沢で、輝く事はない。」

460

ここで「ミューズの女神」は話をやめると、その美しい  
音色の貝殻を落とした。

465

荒れ狂う悲嘆が、そのあえぐ胸を膨らませる。

紅潮した頬の上に、彼女は薄いゴーズのヴェールをかけ

白い腕を隠し、月桂冠を戴く額をかがめる。

しばらく女神は、人類の罪を嘆いて溜息をつき

人類の悲しみは、神々しい眼を曇らせる。

470

第3編 終わり  
インターロード3に続く